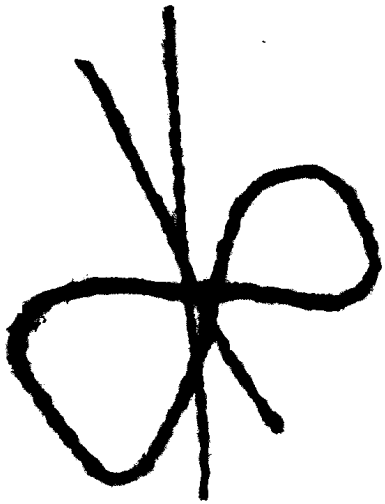
幸福への手帖

幸福への手帖

福田恆存



新潮社版

幸福への手帖

（検印廃止）

昭和三十一年十二月十一日印刷
昭和三十一年十二月十五日發行

定價貳百拾圓
地方賣價貳百貳拾圓

著者　福田恆存

發行者　佐藤亮一
東京都新宿區矢來町七十一番地

發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七十一番地
電話東京三四局代表七一一一（八）
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

所本製藤加田神　製本　社會式株刷印田塚　刷印
Printed in Japan

目

次

まえがき……七
1 美醜について……一〇
2 ふたゝび美醜について……一六
3 自我について……二五
4 宿命について……三五
5 自由について……四四
6 青春について……五五
7 教養について……六六
8 職業について……八〇
9 「女らしさ」ということ……九〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

10 母性……九
11 性について……一〇
12 ふたゝび性について……一九
13 戀愛について……二三
14 ふたゝび戀愛について……二四
15 結婚について……二九
16 家庭の意義……一七三
17 快樂と幸福……一八七
あとがき……二〇五

裝

幀

北

嶋

公

惠

幸福への手帖

まえがき

女性について、そして女性のために、いままでずいぶん多くの文章が書かれてきました。このうえ新しくつけくわえることは、なにもないくらいです。私は女性についてなにかを書こうとはおもいません。女性を、とくに男性から差別して、女性だけの問題について論じようとはおもいません。そういうことは、あまり意味があるようにはおもわれないのです。これから私が書こうとすることは、したがつて、女性についてではありません。私は「男性と女性」という問題について語ろうとおもうのです。

第二に、私は女性の爲にのみ、なにかお喋りをする氣にはなれない。これもあまり意味がないと思うからですが、それならむしろ女性自身が書いたほうがいゝと考えるからであります。ですから、私の目的は、つまり女性の雜誌に幸福の問題について書く氣になつたのは、たゞ女性に向つて、男性のいゝたいことを書くということだけにすぎないのです。

右のことから出てくる當然の結果として、私の文章は、女性ばかりでなく男性にも讀んでいただきたいとおもいます。男性の幸福は女性にかゝつていると同時に、女性の幸福もすべて男性の

態度にかゝつているからであります。

ついでに、もうひとつおことわりしておきたいことがあります。私のいうことは、女性のために、女性について語られた多くの文章とちがつて、女性の讀者であるあなたがたの耳に、かならずしも快くひゞかないでしよう。なぜなら、私の主張は、女性に責任を要求するものであつて、權利や自由を與えることではないからです。そういうと誤解を招くかもしれませんが、わけは、こういうことです。

なるほど、男女は同權であります。男だけに許されて女には許されないなどということがあろうはずはない。これは男女の間柄だけについていえることではなく、同性間についてもおなじことで、ある人に許されて、ある人には許されない、そんなことがあつてよいはずのものではありません。人間は平等です。だが、現實ではそうはいかない。現實の世界では、人間は不平等です。惡いといおうが、いけないといおうが、それは事實なのです。

いずれ、そういうことを詳しく書いていくつもりですが、とにかく、それが現實の世界だとすれば、みなさんはどういうふうに生きていつたらいゝか。いわゆる女性の權利とか、女性の自由とか、そういうことをいくら聽かされても、短い生涯で、ひとりの力で、この現實を變えてしまうことができない以上、おそらくどうにもなるものではありますまい。

與えられた現實を眼をつぶつて受け容れろというつもりはありませんが、それだからといつ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

て、たゞ現實がまちがつているというようなことばかりいつていてもはじまらない。現實がどうであろうと、みなさんは、この世に生れた以上、幸福にならねばならぬ責任があるのです、幸福になる權利よりも、幸福になる責任について、私は語りたいとおもいます。

私はやさしく書くつもりですが、幸福になる道のむずかしさについて語るつもりです。女性が經濟的に獨立すればいゝとか、家族制度を破壞すればいゝとか、臺所を能率的に改良すればいゝとか、その種のやさしいことを、私から期待しては困ります。そんな風に生活の外側をいくら改造しても、女性は、人間は、幸福になれるものではありません。幸福というものは、もつとむずかしいことです。それは、たつた一人の孤獨なたゝかいであります。それは大變困難な道ではありますが、しかし、私は無責任なことをいゝだそうとしているのではない。私は自分のことばに責任をもちます。私のいうとおりの生き方をすれば、かならず幸福になれる——少々神がかつてまいりましたが、すくなくとも、幸福への入口だけは發見できるでしよう。

いくぶん、氣にいらぬことがあつても、最後まで辛抱して讀んでいたゞきたいとおもいます。すくなくとも、いままで、女性のために、女性について語られた文章が、あまり觸れなかつたことを書いていくつもりです。書く側も、讀む側も、なるべく觸れたがらない問題というものが、世のなかには案外たくさんあるものです。ことに男女の問題には、それが多い。そして、眞實はたいていそういうもののうちにひそんでいるのです。

1　美醜について

美醜も、男女の幸福について論じるとき、ひとびとがあまり觸れたがらない――正確にいえば、よく知っているのに觸れたがらない――根本的な問題のひとつです。

身上相談などでよく見かけることですが、たとえば、男にだまされて棄てられたとか、夫が浮氣をしてしようがないとか、そういう訴えを讀むたびに、私はいつも一種のもどかしさを感じます。そのもどかしさというのは、一口にいえば、惱みを訴えるひとの顏が見たいということであります。顏を見なければ、とても答えられないという氣がするのです。そういうとみなさんのうちには、ずいぶん殘酷なことをいうやつだと抗議するかたがいるかもしれません。顏が醜ければ、夫に浮氣されてもしかたはない、男に棄てられてもしかたはない、そういうつもりなのかとおつしやるでしよう。もちろん、それで男性側の非が、許されるわけのものではありませんが、そうかといつて、醜く生れついた女性に生涯つきまとう不幸という現實を無視するわけにはいかないのです。いくら殘酷でも、それは動かしがたい現實なのであります。いや、現實というものは、つねにそうした殘酷なものなのであります。機會均等とか、人間は平等であるとか、その種

の空念佛をいくら唱えても、この一片の残酷な現實を動かすことはできないのです。

しかし、身上相談係というものは、つねに人間平等、機會均等の立場からしか答えてくれません。つまり、女性という女性が、みんな同じ魅力をもつて生れついているという假定のもとに答えるのです。私のように意地わるく顔が見たいなどとは申しません。

こゝで、私は以前よんだある女流隨筆家の文章を想いだしました。そのひとはどこかの盛り場を散歩していた。すると、うしろから足早に歩いてきた若い男が、追いこしざま、ちらつとそのひとの顔をのぞいたというのです。「こういうことは、路上でも、電車のなかでも、なにかの會合でも、つねに經驗することだが」とその女流隨筆家は書いておりました。「その瞬間、私は、若い男の面上に、輕い失望と輕蔑の色が浮ぶのを認めた」と。

この女性は私も知つているひとですが、御自分がそうおもいこんでいるほど醜い顔の持主ではない。その顔はむしろある種の魅力をもつています。眞相は、おそらく、こういうことだつたのでしよう。つまり、そのひとのうしろ姿が、すでに魅力のある顔にくらべても、あまりによすぎたのであろうとおもいます。

それはともかく、うしろ姿を見て、それを追いこして顔をのぞきたいという心理は、私が身上相談を讀んで、質問者の顔を見たいといつた氣もちと、だいたい同じようなものであります。この女流隨筆家は、そういう男性の態度を憎むと書いております。たゞ顔をのぞきこむだけでな

く、その瞬間、じつに遠慮會釋もなく、「なあんだ！」という輕蔑の色を浮べ、その女性を、ただちに自分とは生涯かゝわりのない女の部類に投げこんでしまう男のつめたさは、いくら憎んでも憎みたりないといつております。なるほど、私にも、この女性の怒りは理解できます。このばあいは路上だから、いくら美人でも、それなりに終つたことでしようが、たとえば汽車のなかだつたら、男の視線は、美しいとおもつた顔には何度も執拗にからんでいくでしようが、「自分とは生涯かゝわりのない女の部類」に入れてしまつた顔には、二度とふたゝびもどつていかないでしよう。

だが、それはどうにもしようがないことなのです。男を憎んでもはじまらぬことなのです。人間は他の動物とちがつて高級なのだから、そういう美醜にわずらわされないで、人格の値うちそのものを見ぬくべきだ。もし心ひかれるなら、そういう人格の本質にだけ、心ひかれるべきだ。そういゝたいところだが、それこそ無理な註文というべきでしよう。

女性の雜誌を讀むと、この種の無理な註文が隨所に感じられます。もちろん、直接にそういうことはいわないかもしれません。しかし、たとえば、女が結婚して幸福になるためには、經濟力、智力、いずれの面においても、相手の男と同等の力を維持していかねばならないということがよく書かれております。原理はそうかもしれませんが、事實上は、そういう獨立した女性が、かえつて不幸になつていることのほうが多いようです。智力があつても、醜さのゆえに男の心を

つなぎとめえぬ女があり、智力があつて、しかも男の心をつなぎとめている女があるとしても、そういうばあいでも、理由は、その智力にはなく、じつは、その美しさにほかならないのです。そういうものではないでしょうか。もつとはつきりいえば、經濟力、智力の向上による女性解放を說く當の男自身が實生活では、けつきよく女の美しさに心ひかれ、自說を裏切つているのが通例なのではありますまいか。

ところで、こういうふうに裁かれているのは、女だけではありません。男も同樣に裁かれております。いくら殘酷といおうが、なんといおうが、男と女とがはじめて出あうとき、電車のなかであろうが、路上であろうが、たがいに見あつた瞬間、それぞれに相手を裁いているのです。眼と眼を見かわしたとき、それがいわば「勝負あつた」瞬間なのであります。若いひとたちのあいだでは、見合い結婚はどのこうのという議論が相變らずおこなわれているようですが、嚴密にいえば、一步そとに出た男女は、始終見合いをやつているようなものであります。しかも、この街頭における不意の見合いは、いわゆる準備された見合いよりも、ずつと純粹です。おたがいに素姓も知らず、財產も學歷も知らず、それでいて、その場その場で、しきりなしに「承諾」か「拒絕」かの返事を與えているのであります。

最近、ある外國の雜誌が、日本の女學生とアメリカの女學生とについて、結婚調査をしたそうでありますが、「どんな男にひかれるか」という問いに、アメリカの女學生は、第一位に「健康

な男」（二一パーセント）、第二位に「人格の立派な男」（二〇パーセント）、第三位に「美男子」（一〇パーセント）と答えているのにたいして、日本の女學生は、第一位が同じく「健康な男」（二五パーセント）、第二位が「人格の立派な男」（一二パーセント）「教養ある男」（一二パーセント）、第三位が「筋骨たくましき男」（一一パーセント）「頑健な男」（一一パーセント）で、なかなか「美男子」というのは出てこない。ようやく最下位の一パーセントに登場という結果だったそうであります。いかにつゝましい日本の女性にしても、最下位の一パーセントというのは、すくなすぎます。この調査によると、日本の若い女性は、健康と人格としか考えていないようです。

かといつて、かれらは男の美醜をまつたく度外視しているわけではないでしよう。たゞ、そんなものは度外視しなければならないような暗示を、どこかで與えられているのにすぎますまい。これは女ばかりではない。男のほうもおなじで、美しいということを、戀愛や結婚の理由にすることを、なんとなくはじる傾向があるのです。そして、人柄がいゝとか、やさしいとか、そういう人格的な理由を表看板にしたがります。つまり、美醜という外面的なものより、人格という内面的なものに、心を動かされたというほうが、通りがいゝとおもいこんでいるらしい。

顔の美醜は、生れつきのものだ。人格は努力でなんとでもなる。立派な人格は、その持主が稱讃さるべきだが、美しい顔なんてものは、べつに持主の手柄ではない。反對に、下劣な人格につ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com